



## タンチョウ博士のお話 (第35回)

### あなたは年子<sup>としご</sup>ではありませんか？

年子とは「2歳未満の年の差を持つ兄弟姉妹のこと」とされています。ちなみに3人兄弟姉妹の末っ子の私は、一番上の姉とは7歳、兄とは4歳離れていて、年子ではありません。

ヒトの妊娠<sup>にんしん</sup>期間は280日ほどなので、上の子が2歳になる前に、次の子が生まれても不思議ではありません。また、ヒトと同じ哺乳類<sup>ほにゅうるい</sup>のキリンは妊娠期間が460日ほど、ゾウは640日前後ですが、もし出産間隔が短ければ、年子のキリンやゾウも居ることになります。

では、タンチョウはどうでしょうか。長沼町の番<sup>つが</sup>いは毎年春先に卵を産み、平均32日ほどの抱卵期を経てヒナ<sup>かえ</sup>を孵<sup>ふ</sup>しますが、ヒナの孵化<sup>ふかひ</sup>日は年により違います。

舞鶴遊水地の最初の繁殖は2020年で、以下はすべて確認日ですが、ヒナ<sup>たんじょう</sup>誕生は5月23日でした。翌2021年のヒナは5月10日生まれなので、2020年と2021年のヒナは年子です。次の2022年のヒナ誕生は5月14日で、その時点で前年のヒナは1歳を過ぎたばかりなので、やはり年子です。さらに、2022年と2023年生まれのヒナ(写真)も年子です。つまり、毎年ヒナが生まれるとみんな年子なのです。

皆さんは、タンチョウは毎年卵を産んでヒナを育てるのは当たりまえ、と思っておられませんか。しかし、多くの番<sup>つが</sup>いを調べると、舞鶴遊水地の夫婦は二つの特色を持つ貴重な番<sup>つが</sup>いと分かります。

そのひとつは初産年齢です。タンチョウは普通3歳<sup>せいせいじゅく</sup>で性成熟しますが、最初の卵を産むのは

5～6歳のことが多く、長沼町のメスのように3歳でヒナを育てるのはメス全体の5%ほどに過ぎません。ふたつめは育雛<sup>いくすうけいぞく</sup>継続年数です。同じ番<sup>つが</sup>いが子育てを何年続けて行くかをみると、単年度<sup>たんねんど</sup>(成功の翌年は失敗)の例が70%ほどなのに、舞鶴のように4年連続は4～5%で、これが5年(舞鶴は今年が5年目)となると、メスではわずか1%ほどなのです。もっとも、最長記録15年というとんでもない野生標識付きメスが1羽いて、彼女はすでにあの世へ飛び立ちましたが、記録は当分破られないでしょう。

とすると、課題がまたひとつ見えてきました。タンチョウでは毎年続けて繁殖しない番<sup>つが</sup>いが多いなか、舞鶴のように繁殖を続ける番<sup>つが</sup>いがあるのはなぜでしょう？恐らく、キツネ・アライグマ・オジロワシなど、特にかよわいヒナへの天敵の多さとか、餌の豊かさなどの生息環境や、番<sup>つが</sup>いの個体差などが絡み合っているのでしょう。が、残念ながら理由はまだよくわかりません。

しかし、ここ数年タンチョウの総数は増えていないようで、鳥インフルエンザの危険も考えると、絶滅<sup>ぜつめつ</sup>の心配は消えたとは言えません。従って、道央という新たな地域での連続した羽数増加は、タンチョウという種<sup>しゅ</sup>を保つのにとても重要なのです。何はともあれ、今年も舞鶴遊水地でしっかり子育てしてくれることを、心から願っています。(文：正富宏之)

#### 舞鶴遊水地で孵化後約4か月のタンチョウの年子



左が2022年5月14日、右が2023年5月5日(いずれも確認日)生まれの幼鳥

提供：タンチョウも住めるまちづくり検討協議会

【問合せ先】役場企画政策係 ☎76-8015